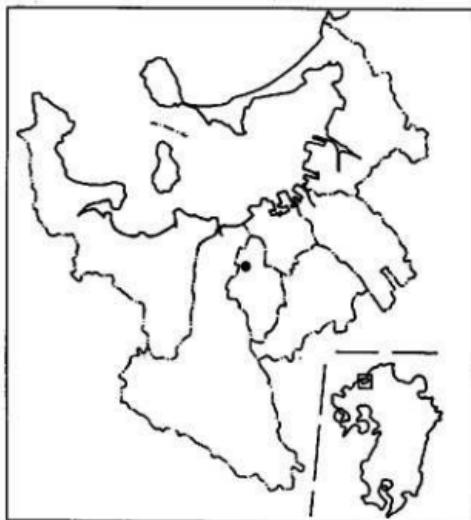


福岡市
いいくら
飯倉C遺跡 2

—飯倉遺跡群 C 地区第3次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第336集



1993

福岡市教育委員会

序

福岡市は、九州の中枢都市として発展し、人口も増加し続けています。特に西部地区の発展にはめざましいものがあります。

本市では文化財の保護に努め、開発事業等でやむなく失われていく遺跡の発掘調査を行っています。

本書もそうしたなかのひとつで、城南区七隈二丁目地内で行った分譲住宅造成に伴う調査の結果を報告するものです。調査では、弥生時代から奈良時代にかけての集落跡が確認されました。

調査から整理に至りましては、株式会社東南不動産を始め多くの方々の御理解と御協力を賜りました。心からの感謝の意を表します。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例　　言

1. 本書は城南区七隈2丁目1180・1181地内における民間の宅地分譲地造成に係わる、飯倉遺跡群C地区の第3次発掘調査の報告書である。
2. 遺跡名は福岡市文化財分布地図「西部Ⅰ」による飯倉遺跡群C地区であるが、通称として飯倉C遺跡とする。
3. 本調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課山崎龍雄が担当した。
4. 本調査の遺構の実測及び写真は担当者が行い、遺構・遺物の整理・浄書は担当者と井上加代子が行った。遺物写真は山崎が担当した。
5. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
6. 遺構番号は連番としたが、ピットは独自で番号を付し、頭に遺構の性格を示す記号を付した。例えば、S B……権立柱建物、S D……溝状遺構、S K……土坑、S X……その他の遺構、S P……ピットである。
7. 本書に係わる記録類・遺物類は、全て福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵保管される予定である。
8. 本書の執筆・編集は山崎が行った。
9. 調査に係わる要項は下表のとおりである。

遺跡調査番号	9110	遺跡略号	IK R-C-3
調査地地籍	福岡市城南区七隈2丁目1180・1181	分布地図略号	073-A-3
申請面積	928m ²	調査対象面積	158m ²
調査期間	1991年5月13日～5月23日	事前調査番号	2-2-395

本文目次

第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査の体制.....	1
第2章 遺跡の立地と環境.....	4
1. 立地と地理的環境.....	4
2. 周辺の遺跡.....	4
第3章 調査の記録.....	6
1. 調査の概要.....	6
2. 遺構と遺物.....	7
3. 小 紹.....	10

挿図目次

Fig. 1 遺跡周辺の地形と遺跡 (1/25,000)	2
Fig. 2 調査区周辺の地形 (1/4,000)	3
Fig. 3 調査区の現況地形 (1/300)	5
Fig. 4 遺構全体図 (1/150)	6
Fig. 5 S B 03 (1/60)	7
Fig. 6 S K 02 (1/30)	8
Fig. 7 S K 02出土遺物 (1/3)	8
Fig. 8 S D 01出土遺物 (1/3)	9
Fig. 9 各ピット出土遺物 (1/3)	9

図版目次

P L. 1 (1) 調査前全景 (南から)	(2) 調査区全景 (南から)
P L. 2 (1) 調査区入口部 (東から)	(2) S B 03 (南東から)
P L. 3 (1) S K 02 (南東から)	(2) S D 01 (西から)
P L. 4 出土遺物	

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

調査地の立地する飯倉丘陵は、本市西南部方面の著しい都市開発の波を受け、市街地化が特に著しい地域である。

平成3年、埋蔵文化財課に福市教壇2-2-395で、調査地に宅地造成の開発申請が提出された。これを受け、本課事前審査担当が試掘調査を行い、埋蔵文化財の包蔵を確認した。本課としては、現状保存を前提に、申請者と協議を行ったが、申請者の開発計画は避けられないところであり、やむを得ず最低限の記録保存を行うという事で、費用を原因者が負担し、発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は、平成3年5月13日から5月23日迄実施し、整理作業は平成4年度に実施した。

2. 調査の体制

調査委託 株式会社 東南不動産

調査主体 福岡市教育委員会

調査統括 福岡市教育委員会埋蔵文化財課長 折尾学 同課第1係長 飛高憲雄

調査担当 庶務担当 吉田麻由美

調査担当 山崎龍雄

整理補助 井上加代子

発掘作業及び整理作業 瀬戸啓治、柴田勝子、庄野嶺ヒデ子、土斐崎初栄、堀川ヒロ子、萬
スミヨ、岩下郁子、大賀順子、釣崎由美、坂木智子、田口美智子

なお、調査に当たっては、株式会社東南不動産、申請者の肥塚弘氏、及び地元の方々から多
大な協力を賜わりました。ここに記して感謝の意を表します。



1. 鎌倉C道跡 2. 第3地点 3. 第2地点 4. 干瀬道跡 5. 熊浜古墳 6. 西新町道跡
7. 原崎道跡 8. 別府道跡 9. 田品尾了森遺跡 10. 鎌倉道跡 11. 原深町道跡
12. 原遺跡群 13. 原遺跡群第11次地点 14. 原遺跡群第9次地点 15. 鶴町道跡
16. 五ヶ村池道跡

Fig. 1 遺跡周辺の地形と遺跡 (1/25,000)



1. 飯倉古墳群C地区

2. 第1地点

3. 第2地点

4. 飯倉古墳群4号墳

5. 飯倉古墳群5号墳(消滅)

6. 飯倉古墳群7号墳(消滅)

Fig. 2 調査区周辺の地形 (1/4,000)

第2章 遺跡の立地と環境

1. 立地と地理的環境

本調査区が立地する飯倉丘陵は、本市西南部の早良平野の東側に立地する。この飯倉丘陵は油山山塊から北へ細長く延びる低丘陵群の一番西側の丘陵で、この丘陵は標高30~10mと南から北へ高さを次第に減じていく。既に市街地化による地形改変が著しく進んでおり、往時の面影を失いつつある。

飯倉C遺跡は、丘陵部全体に亘る飯倉遺跡群の一つである。第3次地点の所在地は福岡市城南区七隈2丁目1180、1181番地、国土地理院発行の地形図「福岡市西南部(1/25,000)」では、北東隅から南へ11.5cm、西へ5.7cmの交点にある。

2. 周辺の遺跡(Fig. 1)

飯倉C遺跡の所在する飯倉・七隈地区は古代では『倭名類聚抄』にいう早良郡の毗伊郷、中世では野井庄の七隈郷として、近世では早良郡の鳥羽触の七隈村として、近代には早良郡の原村の一部としてあり、昭和4年に福岡市と合併し、今日に至っている。

当地区の周辺には旧石器時代から、丘陵部を中心に、各時代の遺跡が点在している。旧石器時代では、カルメル修道院内遺跡で尖頭器が発見されている。縄文時代では五ヶ村池遺跡、クエゾノ遺跡、笹原遺跡などがある。弥生時代に入ると、遺跡数は急激に増加し、田馬尾子森遺跡、浮舟寺遺跡、カルメル修道院内遺跡、別府遺跡、飯倉丸尾遺跡、飯倉遺跡、鶴町遺跡などがあり、丸尾遺跡(第3地点)では、昭和38年の調査で、前期末の甕棺墓から細形鋼剣が1口出土した外、平成3年度の調査では、新たに素環頭大刀などが出土している。

古墳時代は丘陵の各尾根に古墳が散在し、前期では前方後方墳の京ノ隈古墳、中期では最近調査されたクエゾノ1号墳⁽²¹⁾や梅林古墳、後期では前方後円墳の神松寺御陵古墳などがあり、又油山山麓を中心に片江・七隈・倉瀬戸・瀬戸口・駄ヶ原古墳群などの群集墳がある。集落址は神松寺遺跡や片江辻遺跡などがある。古代には調査区の北側を日野尚志氏による西海道の推定線が通っている。中世では西側の原遺跡や田村遺跡など平野部の沖積低地で遺跡が検出され、生活基盤の中心が、次第に平野部に移行していった事が推察出来る。

註1 平成4年度調査。5世紀後半代の鐵治道具を副葬する古墳などが発見されている。

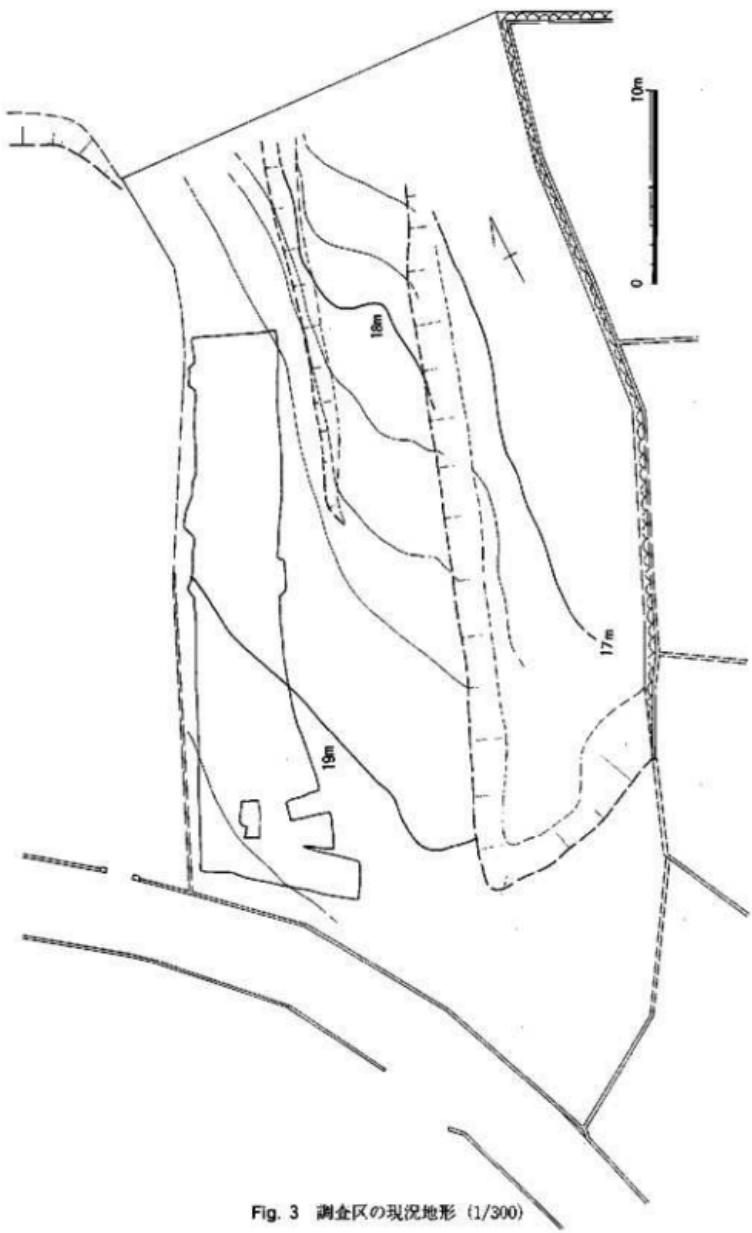


Fig. 3 調査区の現況地形 (1/300)

第3章 調査の記録

1. 調査の概要 (Fig. 4, PL. 1)

本調査区は、北東から浅い谷が入り込む丘陵の東斜面上に立地する。

現地は標高17~20mを測り、南西から北東へ低くなる地形である。

調査は5月13日の現況地形測量後、重機による表土除去作業から開始した。調査区は試掘データを基にして、道路予定地部分を中心に行なった。

遺構面迄の深さは西側で35cm前後、東側は60cm前後で、堆積土は上から20cm位の表土、10~30cmの暗褐色土、南東側を中心に赤身がかった黒褐色土（粘性あり）である。試掘データでは南東側に淡灰褐色土の包含層があるが、今回の調査区外である。遺構面は花崗岩バイラン土である。

検出した遺構は狭小な調査区の為少ないが、掘立柱建物1棟、土坑1基、溝1条、ピット約130個などである。

出土遺物は少なく、コンテナ1箱程度であり、復元、実測可能な遺物は少なかった。

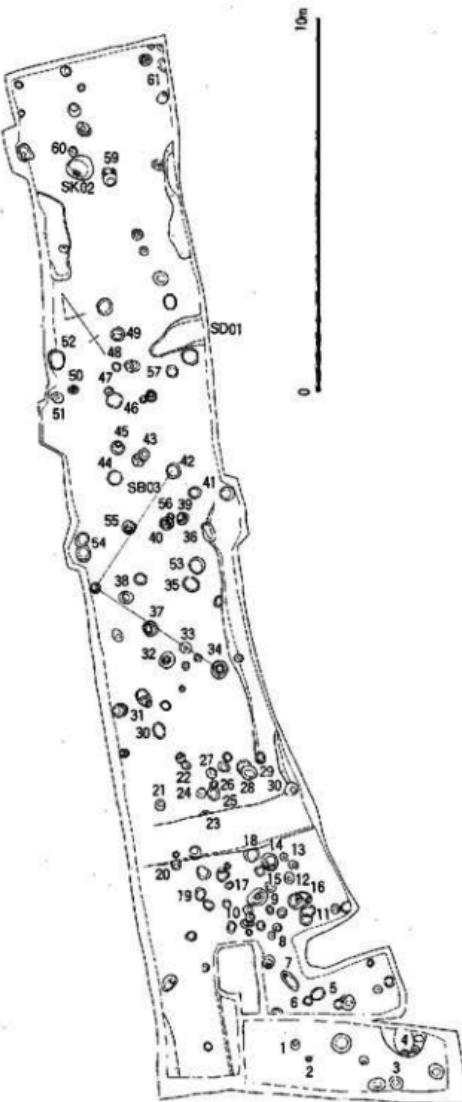


Fig. 4 遺構全体図 (1/150)

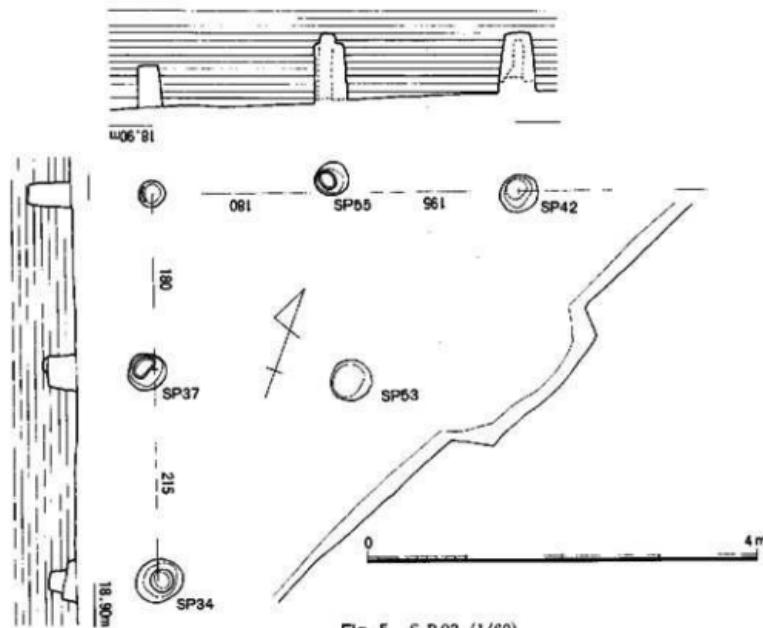


Fig. 5 S B 03 (1/60)

2. 遺構と遺物

掘立柱建物

S B 03 (Fig. 5, P L. 2)

調査区中央で検出した、一部が東壁にかかる建物である。確認規模は南北3.95m、東西3.75mを測る。2×2間の純柱建物の可能性もあるが、はっきり確認出来なかった。柱穴掘方平面は略円形で、規模は直径30~50cm、深さは30~70cmを測り、北側柱穴が縦じて深い。柱穴埋土は暗褐色粘質土を主体とする。柱痕跡は15cm前後である。

出土遺物 量は少ないが、弥生土器・土師器・須恵器の細片が出上している。

土坑

S K 02 (Fig. 6, P L. 3)

北側で検出した、平面プランが不整円形を呈する土坑。規模は長さ0.17m、幅0.64m、深さ0.42mを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色粘質土で、下の方がやや暗くなる。遺物は中間の層でやまとまって出土した。

出土遺物 (Fig. 7, P L. 4) 弥生時代中期後半頃の土器がやまとまって出土した。

1～2は壺。1は口縁部1/6片で、復元口径30.4cmを測る。口縁はく字状を呈する器形でやや肥厚する。色調は赤褐色を呈し、胎土は2～3mmの粗砂粒を多く含む。焼成は良好。2は底部1/3片で、復元底径8.5cmを測る。外面は刷毛目が残るが、全体に磨滅が著しい。3は底部1/2片で、壺と思われる。復元底径10cmを測る。全体に磨滅が著しいが、外面は刷毛目、内面は指おさえ痕がわずかに残る。色調は淡黄色で、胎土は粗砂粒を多く含む。焼成はやや厚い。4は器台の脚部1/5片で、復元脚径12.5cmを測る。全体にナデ調整で、指おさえ痕が残る。色調は橙色で、直径1～3mmの砂粒を含む。焼成は良好。5は鉢の口縁部片。口縁端部は丸くおさめる。磨滅が著しく調整は不明。色調は灰褐色で、胎土は砂粒を多く含む。焼成は普通。

溝状遺構

S D01

調査区北側で検出した東西方向の溝。東壁にかかる為、全容は不明。確認長は1.6m、幅0.8m、深さ約6cmを測る。

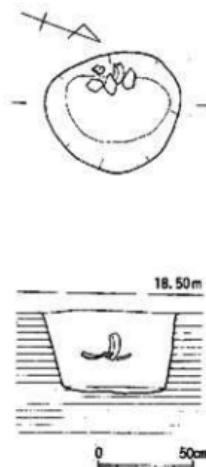


Fig. 6 SK02 (1/30)

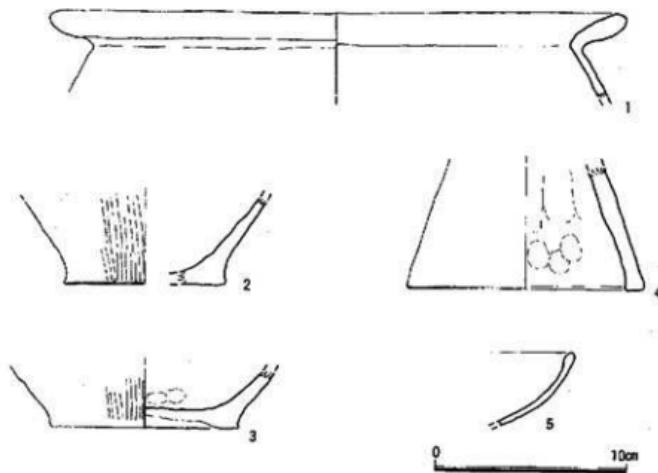


Fig. 7 SK02出土遺物 (1/3)

規模は全体に小さい。埋土は暗褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig. 8, P L. 4) 須恵器・土師器の外、鉄滓15点が出土している。

6は須恵器の杯と思われる。口縁部1/7片で、復元口径11.2cmを測る。ナデ調整である。色調は灰黒色を呈し、胎土は直径2mm程の砂粒を含む。焼成は良い。底部に高台が付く可能性もある。7は土師器の把手である。欠損が著しいが、指おさえ後ナデ仕上げ。色調は淡黄橙色、胎土は2~5mm程の粗砂粒を含む。焼成は良好。

ピット出土遺物 (Fig. 9, P L. 4)

検出したピット数は130、その内遺物が出土したのは61個である。埋土は大きく褐色土・暗褐色土・黒褐色土・地山ロームブロックの4種類に分けられる。遺物は弥生土器・須恵器・土師器・鉄滓などを含むが、大半が細片で、量も少ない。

8はS P 04出土。弥生時代中期後半代の壺口縁部1/6片。復元口径23cmを測る。全体に磨滅がひどく、調整は不明。色調は橙色を呈し、胎土に1~2mmの砂粒を含む。焼成は良好。9はS P 09出土。弥生土器の壺底部1/4片。復元底径10.4cmを測る。外面は磨滅が著しいが、ナデか。色調は橙色を呈し、胎土は粗砂粒を含む。焼成は良好。10はS P 10出土。須恵器の蓋口縁部細

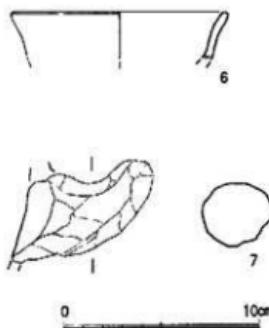


Fig. 8 SD01出土遺物 (1/3)

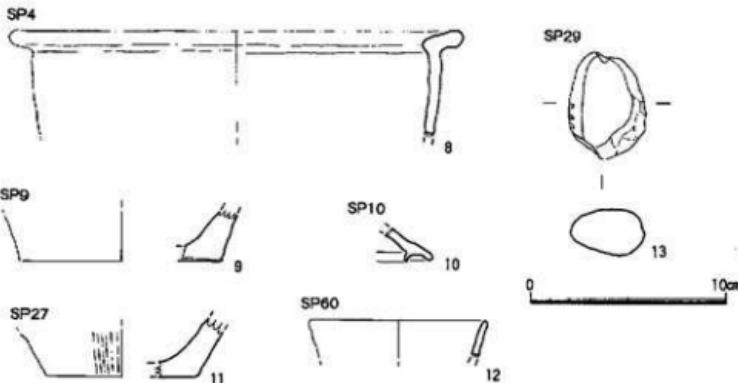


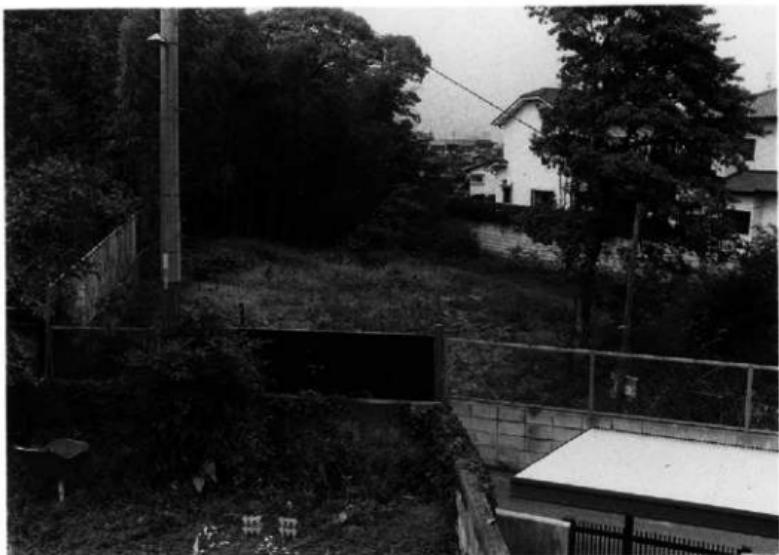
Fig. 9 各ピット出土遺物 (1/3)

片。内面にかえりが付く。色調は灰色を呈し、胎土は精良、焼成は良好。11はS P 27出土。弥生土器の壺か壺の底部1/4片。復元底径10.4cmを測る。外面は磨滅が著しいがナデか。色調は橙色を呈し、胎土は2~3mmの粗糾を含む。焼成は良好。12はS P 60出土。須恵器杯の口縁部1/8片で、復元口径は9.2cm余り、内外面横ナデ調整。色調は暗灰色~暗青灰色、胎土は精良、焼成は良好。13はS P 29出土。石錐と思われる。法量は長さ5.5cm、幅3.9cm、重さ60gを測る。砂岩質の石材で、上・下・右側辺に1ヶ所浅い抉りが入り、左側辺には紐ずれ痕がある。色調は暗灰褐色を呈す。

3. 小 結

今回の調査の成果をまとめると以下のようである。

1. 今回検出した遺構は掘立柱建物1棟、土坑1基、溝1条、ピット等である。
2. 遺構の時期は出土遺物・埋土状況から見て、Ⅰ期弥生時代中期後半、Ⅱ期古墳時代後期から奈良時代迄の2時期を考える。各時期の遺構についてはⅠ期がS K 02、Ⅱ期がS D 01などがある。S B 03については時期は良くわからないが、掘方埋土・周辺遺構出土遺物などから考えて、Ⅱ期に近い時期と見る。
3. 当地点周辺では今回も含めて3回の調査しか行われておらず、飯倉C遺跡の性格の全容が解明されているとはいがたい。ただ今回の調査の成果も考慮して考えれば、現在知られている最も古い時期、弥生時代前期後半の遺構は丘陵西側の第2次地点にあり、中期の段階になつて第3次地点を拡大する。しかし第1次地点ではまだ遺構・遺物が見つかっていない。遺構が丘陵全体に拡がるのは古墳時代後期以降で、群集墳の造営とともに、かなりの大集落が丘陵に存在した可能性がある。



(1) 調査前全景（南から）



(2) 調査区全景（南から）



(1) 調査区入口部（東から）



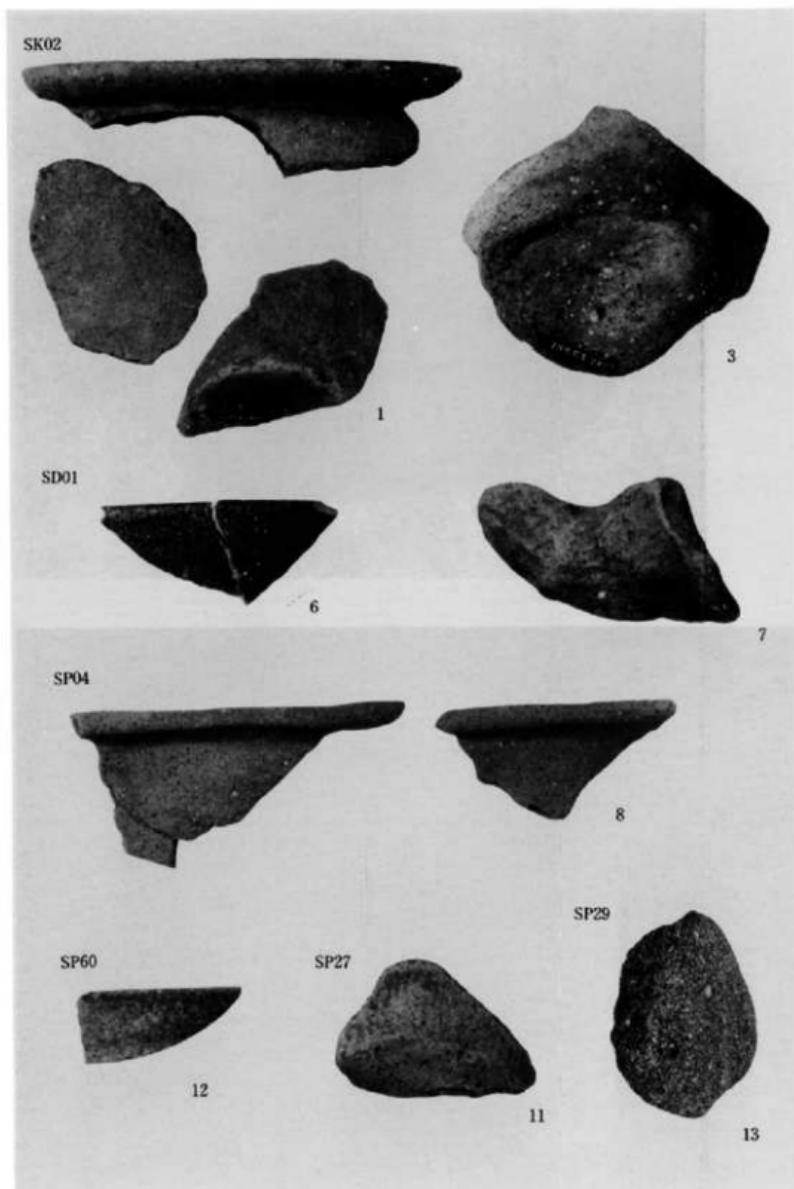
(2) S.B.03 (南東から)



(1) SK02 (南東から)



(2) SD01 (西から)



飯倉C遺跡2

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第336集

1993年（平成5年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神
1丁目8の1

印 刷 正光印刷株式会社